

【フリーペーパー】 季刊

有志舎の出版情報と歴史・歴史学

CROSS ROADS

VOL. 09

2021年7月30日

はじめに

永滝 稔（有志舎代表取締役）

〈芸術エッセイ 狂言師の日々③〉

芸能による国際交流活動

奥津健太郎（能楽狂言方和泉流）

〈著者エッセイ〉

代表させない歴史にむけて

岩島 史（同志社大学政策学部助教）

〈私が見た戦前の中国・台湾⑨〉

父のビンタ

永滝 勇（有志舎取締役）



有限会社 有志舎

はじめに

永滝 稔

夏ですね。でも、今年は何だかどんよりとした夏です。

さて、ここに『CROSS ROADS』第9号をお届け致します。

本号は、『つくられる〈農村女性〉』を刊行していただいた岩島史さんにエッセイをご執筆いただきました。この本が、「女性も男性もよりよく生きられる社会を、「活躍」とは別の言葉でめざすための議論のきっかけになると嬉しい」とのこと。

また連載「狂言師の日々」は第3回目となります。狂言師・奥津健太郎さんによる伝統芸能の楽しいご紹介ですが、今回は奥津さんが実際に行っておられる国際交流活動のお話です。「伝統芸能は、それが伝えられた地域の長い歴史の上に成り立つ思想そのもの」であり、その交流は互いを尊重することにつながるとのこと。

そして、永滝勇の「連載 私が見た戦前の中国・台湾」は、「父のビンタ」です。このエピソードは父からよく聞かされました。こういう横暴な祖父ですが、孫の私にとってはとにかくやさしく、孫に大甘の人だったという印象しかありません。人間の姿というのは何とも複雑ですし、家族の間の関係も一筋縄ではいかないものです。

また、このページの下の広告のように、有志舎と提携している高円寺の古書店・ブックカフェ・酒房である「 Cocktail 書房」は、大学研究室などの蔵書整理・買取などの経験も豊富な古書店です。研究者・読者の皆さん、ぜひ、お声がけください。

本のかたづけ、 てっだいます。

もう読まないなあ、でも、すてるのは…
だれかに読んでもらえるなら、手ばなせるけど…
——本棚に詰まったそういう本たちを、
読みたい本と入れ替えてみてはどうでしょう。
ご不要になった本を、買い取らせていただきます。
買い取れない本も、無料でお引き取りいたします。
そんな本たちは「まちのぼんだな」に並んで、
あらたな読み手に出会う日を待つでしょう。
まずは、お気軽にご相談ください。

※「まちのぼんだな」とは…
誰かに読んでもらいたい本と自分が読みたい本を、
金銭を介さず交換できる、みんなの本棚です。

古書買取 Cocktail 書房

☎070-6430-2603 ✉cocktailbooks@live.jp

戦後沖縄と復興の「異音」 米軍占領下 復興を求めた人々の生存と希望
謝花直美著 占領下の沖縄復興は本土の復興とは全く違うものだった。復興の中で
も多くのものを失いながら生きた姿を、生存と生活の場から描き出す。 2860円

原水禁署名運動の誕生 「新装版」 東京・杉並の
丸浜江里子著 原水禁署名運動の背景や歴史を詳述し、住民運動・平和運動の
大切さを訴える。長らく絶版だった名著が新装版となってここに復刊！ 3300円

満洲国軍朝鮮人の植民地解放前後史 日本植民地下の軍事経験と韓国軍への連続性
飯倉江里子著 「満洲国」から韓国に引き継がれた植民地下の軍事経験とは？ 7480円

つくられる〈農村女性〉 戦後日本の農村女性政策と
岩島史著 「女性の活躍」が女性蔑視をその裏側に貼り付け表面的に叫ばれる現代。そ
の同じ土俵に乗らず、女性たちの過去・現在・将来を描き直す言葉を探す試み。 5280円

文化大革命への道 毛沢東主義と東アジアの冷戦 2860円
奥村哲著 毛沢東主義の危機意識の構造を軸に、中華人民共和国の誕生から文化
大革命、そして改革開放政策までの歴史を、東アジア冷戦史のなかでとらえ直す。

有志舎 東京都杉並区高円寺南 4-19-2-1F (価格は税込)
TEL 03-5929-7350 FAX 03-5929-7352

代表させない歴史にむけて

岩島 史

農村の女性という、何を連想されるだろうか。地元の農産品を活用しながら企業とのコラボレーションやIT技術を駆使して新たなビジネスに挑戦する若い女性農業者だろうか、それともNHK連続テレビ小説『おしん』に象徴されるように、さまざまな困難に耐え抜く「農村婦人」の姿を連想する方もいるかもしれない。一般的には、『おしん』のように封建的な制度の下で過酷な労働に従事する「農村婦人」は、戦後すぐごろまでの状況であり、そこから農業機械化や高度経済成長の影響を受けて農村の生活も女性の状況も変化し、今では地域づくりや新しい農業の担い手として「活躍」するようになるというストーリーが受け入れられているのではないだろうか。本書では、このような、女性は過去には抑圧されていたが、民主化を通して解放され、現在では「活躍」すべきものという認識を「エンパワーメントの物語」と名付けた。本書の刊行後に公表された農林水産省の『令和元年度食料・農業・農村白書』でも、2019年が男女共同参画社会基本法の施行から20年目の節目となることを記念して女性農業者の特集を組み、「『生活改善』から『活躍』の時代へ」として、「昭和23（1948）年から開始された生活改善普及事業により過重労働から徐々に解放され、やがて自らの意思で経営に参画するようになっていきました」と、まさにこの物語を描き出している。

他方で、先日にも元五輪組織委員長の森喜朗氏の「女性がたくさん入っている理事会は時間がかかります」などの発言が女性蔑視と海外からも批判される一方で、組織内ではほとんど批判が起きなかったことが記憶に新しい。この場合は女性嫌悪がストレートに示されているが、男女共同参画や女性のエンパワーメントをめざす発言のなかにも、一見女性への配慮を示したり、褒めているように見え

て、実際には女性を対等なものではないと位置づけているものも散見される。例えば農村女性に関連するものでは、女性の農家経営への参画が「女性の感性を活かす」点から推奨されたり、地元の特産品づくりや農産物直売所、体験農園などを起業し主宰する女性たちをとりあげて、「女性の目線による細やかな気配りや対応」が評価されるなどである。しかし、男性の農家経営が「男性の感性を活かした」と評価されるのは聞いたことがないし、起業する男性が「男性の目線」だから成功したと言われることはない。ジェンダー研究が、これまで「人」という語で「男性」のみを指してきたことを指摘してきたように、これまでの「社会」や「農業」が男性目線でのみつくられていたからこそ、「女性の目線」が強調されるのだらうとは思ふ。しかし成功要因をすべて「女性らしさ」に回収してしまうことは、社会の求める「女性らしさ」に従うことを求めているばかりでなく、「女性だから」と特別扱いすることで、その人がそれまでに培った技術や知識、努力に基づく経営手腕は評価しないという認識のあらわれでもある。

本書では、このような現在日本社会の「女性活躍」と女性蔑視を、同じコインの表裏と捉えている。これまでのよりよい社会をめざす活動や闘い（「女性」のものに限らない）を、「エンパワーメントの物語」で語ること・認識しようとする自体が、社会の様々な非対称な構造と制約を温存しながら、そこから目を背けさせてきたのではないだろうか。本書では、女性の地位向上やエンパワーメントをめざす政策によって、だれが「過重労働からの救済対象」として設定されたのか、もしくは「生活改善の責任者」として設定されたのかを問うこと、そして「解放」や「発展」のストーリーには回収できない多様な農村女性の経験をできるかぎり拾い上げることを通

して、「エンパワーメントの物語」が「物語」にすぎないことを明らかにすることを試みた。

本書は農村女性の側から「戦後」日本社会を考える試みでもあるが、「女性活躍」や「地位向上」ではなく「エンパワーメント」という語を使ったのは、グローバルな開発問題も念頭にあったからである。世界の環境問題や特にアフリカの貧困と飢餓の問題に関心をもっていた私は、修士課程ではなぜ「先進国」が「途上国」を開発するのか、住民参加と現地住民のエンパワーメントを謳ってはいても、結局進むべき方向は「先進国」が決めているのではないかと考えていた。当時、開発学の分野や日本の国際協力機構（JICA）では、日本の戦後復興の経験、なかでも生活改善普及事業を、社会開発の成功モデルとして輸出しようとするプロジェクトがすすめられていたこともあり、日本の「戦後」経験を批判的に問い直すことで、安易なサクセス・ストーリーに対抗したいと考えたのがこの研究を始めたきっかけだった。「相手の主体性を重視して、状況を改善してあげたい」という言葉の包み紙によって、国家間の権力関係

や帝国と植民地主義の歴史、経済的な強者と弱者、社会における立ち位置の違いといった関係が見えにくくなっているという構造は、本書で論じた農村女性のエンパワーメントも、「女性活躍」も、国際的な開発援助も相似していると思う。

私のような批判的な研究は、「現場で頑張っている女性たちの活動に水を差す」と非難されることもある。しかし現場の女性たちも様々である。「女性活躍」の社会に対して、憤りを感じている人もいれば、都合の良いところだけ利用しようと考えている人もいる。「現場の女性」も「農村女性」もひとくくりに代表させず、できる限りその多様性に目を凝らしたいと思う。本書が、女性も男性もよりよく生きられる社会を、「活躍」とは別の言葉でめざすための議論のきっかけになると嬉しい。

Information



『つくれる〈農村女性〉—戦後日本の農村女性政策とエンパワーメントの物語—』

岩島 史 著

A5 判、ハードカバー

240 ページ

定価（本体 4,800 円＋税）

ISBN978-4-908672-46-0

芸能による国際交流活動



奥津健太郎

第7号から4回に渡って連載しております能楽狂言方泉流の奥津健太郎と申します。第7号では、狂言と私の出会い、亡師のこと、息子のこと、伝統芸能が持つ力などについてお話しし、第8号では、私たち演者が大切にしている「面」を取り上げました。今回は、私が近年心を寄せてきた芸能による国際交流、なかでも中国の実演家との継続的な交流と、ヨーロッパでの公演についてご紹介します。舞台にご興味をお持ちいただくきっかけになれば大変嬉しいです。

芸能による国際交流の意義

日本の伝統芸能はその源流をたどると東アジアの各地域から伝えられ、日本人の好みに合うように洗練されてきました。古来、多くの人々が大陸や朝鮮半島などから日本に渡ってきましたが、人とともに芸能も伝えられたのです。能狂言は時の権力者にも愛され、装束（衣装）には貴重な舶来の裂も多く使われました。演技は伝えられた国や地域の好みに応じて変化しましたが、様々な芸能を比較すると今でも多くの共通点を感じられ、日本も世界と繋がっていることを実感できます。

また、遠くヨーロッパなど日本と異なる文化圏での公演は、私たち演者が普段当たり前に演じている舞台に思いもよらない反応があったり、ストレートな疑問が投げかけられたりするなど、自らの視点を問い直す得難い機会にもなります。

伝統芸能は、それが伝えられた地域の長い歴史の上に成り立つ人々の思想そのものです。それ故に、芸能による交流は互いを尊重することに繋がり、相互理解の芽を生やし、時間をかけて穏やかに育てることが出来ます。その意義は誠に大きいと考えています。

中国の芸能実演家の方々との交流

2018年1月、私は一般財団法人日中文化交流協会の訪中団の一員として、近くて遠い

国とも言われる中国を1週間に亘って訪問、北京・蘇州・上海で実演交流を行いました。中国では語り物芸のことを曲芸と言います。中国の曲芸は200とも300あるとも言われますが、中国曲芸家協会の紹介で多くの実演家の多様な演技に触れ、時には食事を共にしながら語り合い、理解を深め合いました。その後、2018年8月と2019年11月には家族とともに上海を再訪し、京劇、昆劇、越劇、評弾などの実演家と交流を続けてきました。2020年以降は新型コロナウイルスの流行によって直接訪問することは叶わなくなりましたが、一度は直接会った者同士、現在はオンラインによる交流を続けています。

交流を続けていくと、共感すること、刺激を受けることがとても多いことに驚きます。演技だけではなく、舞台に向ける気持ち、稽古のあり方、現代に生きる伝統芸能の模索、そして、芸能で生活する難しさ等々、時にはかなり突っ込んだ会話になることもあります。中国滞在中には一般のお客様の前で演じる機会もあります。国が違い、使う言語は違っていても、演技が伝わり、舞台を共有する感覚を得ることができたのは貴重な経験でした。庶民の心情を演じる狂言は芸能自体に包容力があり、国や地域を越えて誰にでも理解されます。温かい大きな拍手は今でも忘れることができません。

2019年スイス・ドイツ公演

2019年8月～9月には、観世流の梅若研能会によるスイス・ドイツ公演に息子とともに参加しました。公演では、能〈猩々乱〉〈恋重荷〉、狂言〈雷〉を上演しました。どの公演も満席という訪問前の評判は嬉しいものでしたが、一方で芸術文化に関心が高い国々でもあり、舞台がどのように受け止められるか心配もありました。ところがそれは全くの杞憂でした。「遠い異国の伝統芸能はどのようなもの

か」というような単純な興味ではなく、能狂言が表現する世界を知りたい、作品が創られ、伝承されてきた意味は何なのだろうかというような知的な関心が非常に高く、身を乗り出して舞台に接する姿に演者側が驚かされ、圧倒されました。舞台には詳細な字幕をつけたので、どの演目も楽しめたとの反応でしたが、舞踊的な〈猩々乱〉より、人物の内面描写の要素が強い〈恋重荷〉の方により高い関心が集まったのも意外なことでした。狂言に対してはとても素直な反応で、万国共通で愛される狂言の温かな笑いも再認識しました。

公演最終地にして最大の会場となった、ドイツのベルリンフィルハーモニー大ホールでの公演は、チケット約1,800枚が2か月前には完売、当日券を求める人々のために、急遽、舞台真横の席まで販売したと聞きました。文化も違えば言葉も違う、遠く離れたヨーロッパの方々も熱心に鑑賞して下さったことに感謝の念を抱いたことをつい最近のことに思い出します。日本では難しいと敬遠されることも多い能狂言ですが、海外の反応を見るにつけ、日本人だけではなく人類にとっての宝のひとつであり、今後も普及活動をし

ていきたいと意を強くし、また、海外の多くの文化を知りたいと考えるようにもなりました。

今回は近年の国際交流から考えていることをお話ししました。政治・経済による交流は大きな推進力を持ちますが、時として摩擦を生んでしまうこともあります。芸能を含む文化・芸術による交流は、はじめは僅かな力かもしれませんが。しかし、お互いに相手を尊重し、共通点を見つけていくことで培った関係は容易に崩れることはありません。しかも、交流をきっかけに、私自身、伝統芸能に携わっていることへの誇りを一層強くし、自信を持つことができたのは素晴らしい経験でした。コロナ後にはより一層の国際交流を進めていきたいと願っています。コロナ禍により日本国内でマスクが不足した昨年、中国の多くの友人から「いつでも送るよ!」と連絡があったことも有り難く思い出しています。

次号では、私が同人となっている天籟能の会による「日韓芸能の協同による新作能〈望恨歌〉上演プロジェクト」についてご紹介したいと思います。

Information

〈狂言やるまい会東京公演へのお誘い〉

師・野村又三郎が主催する「狂言やるまい会」。東京公演が9月23日(祝)に東京・千駄ヶ谷の国立能楽堂で開催されます。

狂言の演者は、年齢や芸歴に応じた節目の演目があり、それらを初めて演じることを「披^はキ」と言います。今回は息子・健一郎が、源平の合戦で那須与一が扇^{あふ}の的を矢で射る場面を演じる「那須語」を披^はきます。式楽〈翁・三番叟〉、狂言〈昆布柿〉〈朝比奈〉〈鳴子〉なども上演する豪華番組です。是非ご覧ください!

最新情報、お申し込みは奥津健太郎の公式サイトをご覧ください。

<https://kyogen-okutsu.amebaownd.com/>



[HOME](#) [PROFILE](#) [ENGLISH](#) 三



奥津健太郎・健一郎

能楽和泉流狂言方の奥津健太郎と奥津健一郎の活動をご紹介します
紹介する公式サイト

2021.06.06 00:00

息子が浅草神社に芸能奉納させていただきました





永滝 勇

父・安太郎が勤めていた華北電電の開封支店長は父よりもいくつか年長の人で、家族を内地に残しての単身赴任なのだが、何故か社宅に奥さんと呼ばれている女性がいた（当時で言う「お婆さん」だったのだろう）。支店長とはかなり年が離れていて丸顔のぽっちゃりした可愛い女の人で、子供がいなかったため私のことを可愛がってくれた。

しかし、この支店長は何かと小言や愚痴を言い、下働きの中国人に対しては、無抵抗なことをいいことに、すぐに殴る蹴るの暴行を加えていた。私も何度かこれを目撃したことがあり、子供心にも酷い事をするなと思っていた。殴られて顔を腫らしている中国人を母が家の中に入れ、手当てをしているところを見た事もある。あるとき、父が事務室から帰って来て母からこの話を聞かされ飛び出してきた、やがて顔を真っ赤にして帰ってきた。

父は、「あいつは相手が弱いと思うと、やたらと権力を振り回す。今、喧嘩してきたよ」と言うと、母に「お前、後で陳君（殴られていた人）のところに見舞いに行ってくれ」と言ってまた事務室に戻って行ったのだった。

そんな事があって数日後、私が学校から帰ってくると母が内地から届いたらしい菓子を紙に包んで、「勇、これを支店長さんの奥さんにあげてきて。内地から送ってきましたので、とってね」と。私はこの奥さんに可愛がられていたので、すっ飛んでいった。今考えると、母は気短かな父が支店長と衝突し機嫌を損ねる事があっては、と心配してのことだったのでは、と思う。

私が母の言いつけ通りに支店長宅にお菓子を届けに行くと、奥さんは「お駄賃よ」と言って大きなリングを手渡してくれた。家に帰り、そのリングを母に剥いてもらって食べて

いると、父がひょっこりと事務室から戻って来て、母が差し出す林檍のひと切れを手に取り「珍しいな、どこからのいただきものだ」と訊いたので、母が「支店長さんの奥さんから、この子が貰ってきたの」と言った。

それを聞いた途端、父は手にしていたリングを床に叩きつけ、やにわに私の口をこじ開けると食べかけていたリングを口から吐き出させて床に捨てるなり、火の出るようなビンタを私の頬に見舞ったのだ。

「乞食のような真似をするなっ。何だってあんな奴のところに行くんだ!!馬鹿もん!」

子供の私には父と支店長との諍いの事など分るはずもない。何で急に父が怒り出したのか分らないままびっくりしてオイオイと泣き出してしまった。

母が私を抱きしめ、「何でこの子をっ!」と一緒に泣きながら抗議していたが、父はプイッと事務室へ戻って行ってしまった。

父はとにかく気が短いうえに、曲がったことや偉そうにする人間が大嫌いな性分だったので、ケンカをして組織や会社を辞めてしまうということが何度もあった。一方で、自分は子どもに対しても感情を抑えられず、自分の言うことに無条件に従わせようという横暴なところもあった。

私は、大きくなるまでに随分と叱られたり叩かれたりしたが、大人になってからもこの時のビンタだけは忘れた事がない。自分の感情を子供にぶつけるその姿を許すにはかなりの年数が必要だったのだ。

© 有限会社 有志舎

〒166-0003 東京都杉並区高円寺南 4-19-2、クラブハウスビル 1 階

TEL 03-5929-7350

FAX 03-5929-7352

mail : yushisha2005@gmail.com

URL : <https://yushisha.webnode.jp>

DTP…言海書房

無 料
(禁転載)